The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	和泉式部正集の成立 : E歌群について
Author(s)	鳥居, 幸子
Citation	語文. 1973, 31, p. 32-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68608
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

和泉式部正集の成立

——E歌群について——

鳥居幸子

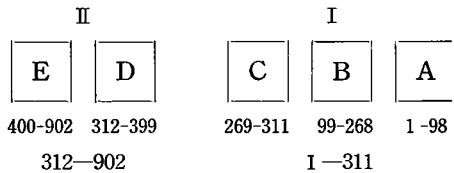
一

和泉式部正集の成立過程については、現在清水文雄氏によって、次のようなことが知らされている。

。この集は成立事情を異にするいくつかの歌群の集積されたものであり、同時に、各歌群相互の間には、重出歌が著しく多く存すること。

。これらの歌群は本文自体の内証および、勅撰集や他の諸集との比較によって、ある時代にまず甲と乙とが結合して小歌集を成していたのが、つぎの時代に丙、さらに丁と合するといふやうに、かなり長期間にわたって、複雑な成立過程を辿り、その最後的形態が全体として成立したのが、千載集撰進年から、もっとも遅くて定家の歿年までの間であったと推定されること。

。その雑纂の資料となった歌群とは、歌の重出関係、排列形態および内容の諸点から吟味して、成立の直接材料となったものは、Ⅰ・Ⅱの二大歌群であるが、さらに精査すると、ⅠはABCの三大歌群の結合されたものでありⅡはDE二歌群の結合されたものであることがわかる。ここでⅠ・Ⅱの二大歌群を考えるのは、重出歌がⅠおよびⅡのそれぞれ自体内に皆無であること、さらに歌の排列形態からみても、前者がBを中心としてその前後にA・Cが附加された形としていつの頃からか存したと思はれ、これに対して、後者が、DE二歌群の結合された形において、ある期間存したことも考えられること。（注、これらについての考証は、清水文雄「和泉式部正集の成立」—国文学攷、第一巻第一輯に詳しい）



二

清水文雄校訂「和泉式部歌集」902首について、清水論文の追試を試みた結果、私は、正集を形成する五歌群の一、E歌群について、清水論文を進める手がかりをつかんだのではないかと思っている。E群がB群との重複歌をもつことは、清水氏がすでに言われたが、私は、この重複歌を詳しく調べることによって、E群の構造を解明してゆきたい。

B群（99～268）　E群（400～902）は19首の重複歌をもつ。この19首の重複歌を中心として、その関連歌をぬき出してみると、後述の33首をあげることができる。ここで言う関連歌とは、贈答関係、詞書、歌の内容等から、重複歌と連作であることが明らかである歌の他、次のような場合も関連歌とした。

628人かたらひたる男のもとより「わするな」とのみいひおこすれば
　いさやまたかはるもしらずいまこそは人の心を見てもならはめ
629おなじ人つねにわすれぬよしをのみいひおこすれば
――（省略）

右の場合、628はB群の212と重複している。629の詞書の「おなじ人」とは628の詞書にいう「人かたらひたる男」であろう。即ち629の詞書は628を意識して書かれている。この場合629はB群と重複歌を持たないが、628～212の関連歌としてぬき出した。

これらの関連歌は、E群の二首

788おぼろげにをしみし花のちりにける枝にさへこそめはとまりけれ
789これを聞きて、人「さくらはいまさきなん、ちりにけるはなをばなにかおもふ」といひけるに
　まさざまにさくらもさかばみにはみん心に梅の香をばしのびて

に対してB群にも

213むめのちりはてたるをながめて
　おぼろげにをしみし花は散りにけり枝にさへこそ目はとまりけれ
214人の「いまさくらもさきなん」といへば
　まさざまにさくらもさかんみにはみん心のむめのかほはしのびて

のように788～213・789～214・と続いて重出している例もあるのであるから、本来なら、当然、他方にもあってよいものである。

このようにしてぬきだした33首について、E群B群の対照表を作ると表Ⅰのようになる。これは次の場合にわけることができる。

(1)一首対一首、二首対二首、等の単なる重複
(2)Eに関連歌があってBにない場合。(3)Bに関連歌があってEにない場合。
(4)(2)(3)の複合の場合

このうち(1)については問題がないので、(2)(3)(4)の場合に注目する（以下問題となるものだけを、表Ⅰよりぬきだし、表Ⅱに本文で示した。参照しながら読まれたい）

三

これら(2)(3)(4)の場合を精査すると、それぞれの歌の有無が、単なる偶然ではなく、ある規則性をもっていることに気づく。私は、まず仮説をあげ、それによって(2)(3)(4)を解釈してゆくことで、仮説の正統性を証したいと思う。

私は、E群は、ある非常に詳しい資料から、意図的に和泉の歌のみを整理してぬき出したものであると思う。（これは、あくまで重複歌を中心とする33首のみから得る仮説で、この仮説のE群全体への環元については後述する。この場合はまず、重複歌を中心とする33首のみについて論を進める。）

右にあげた私の仮説に、まず矛盾することがある。E群がLの㋑804（表Ⅰ）に和泉以外の人の歌を含むことである。E群が和泉以外の人の歌を含んでいたのではこの仮説はなりたちえない。まずこの点から解決したい。

。表Ⅰ・Lの場合。

これは二月末の梅の散り果てた頃に人（男）が来て、散り果てた梅を惜んだこと。同じその男が、四月二十余日、またまた山吹の散り果てた頃に来たので、どうして花の散ったあとにばかり来るのかと云いあったこと――について詠んだ一連の歌五首である。E群に246〈返し　をとこ　散りにけむ花をば今はいかがせん見てすぐしけん人にとはばや〉がないのは、私の仮説によれば、和泉の歌ではないからだと解釈できる。また、E群は大変詳しい資料にもとづいているので、B群にない歌805をも有しているのだと解釈できる。けれども、E群が804に和泉以外の人の歌を含んでおり、詳しい資料があるにもかかわらず、B群の有する248を有していないのは、仮説に反する。もしが804和泉の歌、E群にない248が男の歌であれば、仮説にとって大変都合よいのである。そこで〈全釈〉をもう一度詳しく調べると、問題の㈥（804〜247）は、梅の散り果てたあとにやってきた男が、またまた山吹の散り果てた後に来た四月二十余日の歌である。

（表Ⅱ参照）

㈥247―このおなじとこを、又やまぶきのちりはてにたるに

　けふまたなにか来つる

　ひとへだにちりものこらず八重の山吹

㈥804―むめの花ちりて、くちをしがりし人の

　また四月二十余日の程にきたるに

　けふもまたなにかはきつる

　ひとへだにちりも残らずやへの山吹

「全釈」は重出歌に対しては先出のもののみ通釈するという態度をとっているので、247の通釈はあるが、804の通釈はない。「全釈」による247の通釈は次のようである。

「247―同じこの男が、山吹のすっかり散ってしまっているときに

　先日は先日で桜（―島居注梅の誤りか）を見損ねたし、今日も又、何の為にここへやって来たのやら、楽しみにして来た八重山吹の一片だって散り残ってもいませんな」

このように「全釈」では247の作者を男と解釈している。従って、次の次の返歌248は和泉の歌と解釈している。

㈡248―かへし

　ちりにきといひてややまん

　山吹の折りからしたる枝はなしやは

「248―返歌

　散ってしまいましたな、なんてそんなあっさりしたあきらめ方があるものですか、ごらんあそばせ、あっちこっちに人が折り枯した山吹の枝があるでしょう。本当に花の好きな人は、盛りのうちにみんな来て楽しんでいったのですよ。あなたには大体あきらめがよすぎるから、それでいつも花を見損ねるようなまぬけな事になるのですわ」

この「全釈」の解釈のように247を男、248返歌を女（和泉）ととっても、別におかしくはない。けれども、これは247248の二首だけをみているからである。歌はまだ続いている。B群にはないが、㈡に続いて㈭が詠まれているのである。㈡で〈ちりにきといひてややまん山吹のおりからしたる枝はなしやは〉と詠んだのをうけて、

㈭805―「をりからしたる枝はおかずや」といひたれば

　さてのみはやまじとおもへ

　えだをさへ折りからしてぞ井手の山吹

と詠んだ。「全釈」は㈥を男の歌、㈡を女の歌と解釈したのであ

るから、当然㊧はまた男と解釈しなければならない。男が詠み、女が返し、また男が返したのである。しかるに、「全釈」は㊧805を女（和泉）の歌と解釈している。

「805―「でも折りからしたる枝があるじゃありませんか。何で来たということもないでしょう」といっているので

あたしの方では山吹の花をみるだけではまだもの足りないで、枝まで折っては枯れるまで、めでていたのですもの、あなたもこれからは、そう始終、花をみそこねてばかりいないことにしょうとぐらいは思って下さいよ。はりあいのない」

「全釈」は805の詞書を『「でも折りからした枝があるじゃありませんか」といっているので』――と通釈して、805を和泉の歌とした。「……といっているので」――と言っているのは和泉だから、「折りからした枝があるじゃありませんか」――と言ったのは男であることになる。「折りからしたる枝はなしやは」と男が言ったのであれば、先の∧ちりにきといひてややまん山吹の折り枯らしたる枝はおかずや∨の歌は男の歌でなければおかしい。つまりこうである。㋩㋥㊧は二人の人間が交互に歌を贈答したのであるから、㋩が男㋥が女であれば㊧は男でなければならず、㊧が女であるのなら、㋥が男㋩が女でなければならない。たまたまBに㋥がなく、Eに㊧がないことから、「全釈」を一見して容易にはその矛盾に気づかないけれども、㋩㋥㊧が一連の歌であることを知って読めば、これはおかしいのである。

もちろん、「全釈」の著者は、これに気づいておられ、㋩㋥㊧とならべると、右のように作者が入れかわってしまうこととを気にかけておられる。けれども、気にかけた上で、やはり、この解釈が穏当であろうとされたのである。詳しいことは何も述べておられないが、穏当というのは、おそらく次のようなことであるまいか。

㋩を男㋥を女と解釈したのなら当然㊧を男とすればよい。ところが、㊧はどうしても女の歌である。とすれば、㊧を支点にして、㋩を女、㋥を男、㋩を女とさかのぼってゆけばよい。ところが㋩は∧けふもまたなにか来つる∨という歌なのである。客が訪ねて来たのに、女が客に対して∧けふもまたなにか来つる∨というだろうか？　そこで「全釈」は、たとえ作者が入れかわっても、やはり㋩は、やって来た男が自分で∧けふもまたなにか来つる∨と言ったと解釈して、男の歌とすることが穏当と考えられたのだと思う。

私は、この「全釈」の態度に不満である。一つの歌の作者が、前条と後条で入れかわっていて穏当ということはない。私は和泉なら客に∧けふもまたなにか来つる∨と言うと思うのである。この花見の一件に関する私の歌の解釈は次のようである。

㋩―247・和泉・梅の花が散ってくやしがった人が、また山吹の散り

はてたころ来たので

今ごろきたって八重山吹のひとえだって残ってやしませんよ（と軽い揶揄の調子で、和泉ならこのくらいのことはいう）

（すると男は

㋥248―男―かえし

散ってしまったなんていってあきらめるものか、山吹の折りからした枝があるでしょう。（とやりかえす）

㊧805は、その男のケロッとした答えに半ばあきれながら、こっちは「えださへおりからして」鑑賞しているのに、「さてのみはやまじと思へ」（「全釈」の通釈通り）と答えるのである。

右のように解釈しても歌意は通じ、作者が入れかわったりしないだけ自然である。

これでLは私の仮説を証しこそすれ、仮説に反することはなくなった。ついで、同じくLの例によって、私の仮説の「Eは大変詳しい資料を持つ」という部分の根拠を示したい。

㊁248―かへし

ちりにきといひてややまん

山吹の折りからしたる枝はなしやは

㊍805―「をりからしたる枝はおかずや」といひたれば

――――

〰〰線部の類似に注意されたい。Eには㊁にあたる歌はない。けれども㊍の詞書が㊁のない事を補っている。㊍805「をりからしたる枝はおかずや」はどこからきたか？　やはり㊁の「おりからしたる枝はなしやは」から来たと考えるのが、妥当であろう。つまり、私はこう考える。Eが資料としたものには㊁も㊍もあった。けれどもEは和泉の歌のみをとりあげる方針で、㊁をとらぬこととした。けれども、㊁㊍は関連した一連の歌である。㊁をとらぬために㊍がわからなくなってしまってはこまる。そこでEは㊁の省略を補うような詞書を㊍につけたのである。後述するが、このような例は、Lの㊁㊍の場合に限らず度々みられるものである。

さて、表Iに関して、私の仮説に矛盾する例がもう一例ある。これは先のL―804の場合のように、和泉以外の歌であるのにE群にあるという積極的矛盾ではなく、和泉の歌であるにかかわらず、E群にない、という消極的矛盾である。それは、N―250の場合であるがこれについては次のように解釈できる。

㋑―250七月八日、大将殿よりありしはわすれて御返しにきこゆる

七夕のけふのよはひのうちかへりまたまちどほに物や思はん

㋺―251

彦星はおもひもすらんなかなかに秋はきのふのなからましかば

㋺―833　七月七日「たなばたまちどほにおもふらん」と人のいひたるに

彦星はおもひもすらんなかなかに

秋はこよひのなからましかば

B群には㋑㋺二首があるが、E群には、㋺しかない。大変詳しい資料をもつと仮定されたEが、何故、㋑を落としたのであろうか、㋺―833は〈七月七日「たなばたまちどほにおもふらん」と人のいひたるに〉の詞書をもつ。この「たなばたまちどほにおもふらん」というのは、やはり、㋑の「またまちどほに物や思はん」から来たものであろう。

事実どうであるかは別として、Bでは㋑は「大将殿よりありはわすれ」て、「御返しにきこえ」た和泉の歌であるとあつかっているのに、Eの編者はこれを「人のいひたる」歌――Bの詞書でいえば「大将殿よりありし」歌と解釈したのであろう。

つまり、和泉の歌ではないから㋑を省略して、その省略を補うべく㋺833に〈七月七日「たなばたまちどほにおもふらん」と人のいひたるに〉の詞書をつけたのである。とすれば、これは、仮説に矛盾しない。

四

表IL・Nにみられた矛盾はこれで解決できたと思う。表Iに関

して、あとのすべての場合、私の仮説で解釈できる。　表Ⅰに関して、Bにあってはエにない歌は、すべて、和泉以外の歌である（又は、Bでは和泉の歌であっても、Eでは和泉以外の人の歌と解された歌である。）　Eは、和泉以外の人が詠んだ歌は含まないが、和泉が詠んだ歌に関しては、Bよりもずっと詳しく歌を録しているといえる。Eは、おそらく、EとBをあわせみて想定されるよりも、もっと詳しい資料から、和泉の歌のみを、整理してぬき出したものである。例えば、表1・Kの場合、私達は、表より、㋑㋺㋩の三首を知ることができる。Eには㋑がなく、そのかわりに、㋺800に、〈すみよしに詣でたりける人、いとほどへて「いかが」などいひたるにの詞書がある。㋑によれば、津の国の人は、津の国の住吉は、有名なところだけれど、古今集に〈住吉と海土は告ぐとも長居すな人忘れ草生ふといふなり〉というように、忘れ草の名所で、うっかり行ってあなたを忘れたりしてはいけないので、決して住吉に行ったりしないのだ、と言っているのに、Eの編者は、その複雑な内容をあっさりと、〈すみよしに詣でたりける人〉としてしまった。津の国の人は住吉には行かないと言っているのであるから、この詞書は事実には反するが、津の国――住吉――忘れ草　の連想で歌が詠まれていて、その㋑を省こうとする時、もし、㋺800に〈津の国の人いとほどへて「いかが」などいひたるに〉という詞書を添えれば、確かに㋑の内容には反しないけれども、㋺の歌との対応が悪く、㋺を生かすことができない。その意味で、㋑の歌の内容には反しても〈すみよしに詣でたりける人、いとほどへて「いかが」などいひたるに〉は、大変うまい詞書のつけ方であると思う。

㋩〈津の国なる人「たびたびふみやりしはみぬか」といひたるに――〉の津の国の人が、㋑の人と同じだという確証はないが、おそらく同じ人なのであろう。そして、Eの800が㋑の歌の返しであったように、㋩も津の国から来た歌は、「たびたびふみやりしはみぬか」という内容だったのであろう。Eの資料にはおそらくその歌も含まれており、この、Kの場合には、4首の歌を、資料本は含んでいたのであろうかと考える。

五

さて、重複歌を中心とした33首から導いた仮説を、E群全体にあてはめることはできるだろうか？　むろんできない。もしこの仮説が、E群全体にあてはまるならば、E群五百二首はすべて和泉の歌ばかりでなければならず、清水氏がそれに気づかれぬわけがない。

結論から述べると、E・Bの重複部分より導いた私の仮説は、清水氏がE群をさらにE^{I} E^{II} E^{III} E^{IV} E^{V}にわけられた、そのE^{I}四百二十一首の後半部に適用される。これについて詳しい事を述べるのは次の機会にゆずりたいが、重複歌33首より得た仮説を、E群の二百余首に適用できることから、この仮説は、正集の½を占める大歌群でありながら、その成立構造の定かでないE群の、構造解明の重要な手がかりとなると思う。

（昭和四十六年度卒業生）

表Ⅰ

	A	B		C		D	E	F	G	H	I			J		K		
	イ	イ	ロ	イ	ロ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	ロ	ハ	イ	ロ	イ	ロ	ハ
E	625	626	627	628	629	633	656	686	718	725	735	736	ナシ	788	789	ナシ	800	801
			○		○													
B	210	206	ナシ	212	ナシ	211	186	262	216	152	ナシ	252	253	213	214	243	244	ナシ
	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○

	L					M		N		O	P		Q		R
	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	イ	ロ	イ	ロ	イ	イ	ロ	イ	ロ	イ
E	787	ナシ	804	ナシ	805	814	815	ナシ	833	836	843	844	ナシ	849	850
					○		○					○			
B	245	246	247	248	ナシ	219	ナシ	250	251	161	151	ナシ	183	184	160
	○	×	×	○		○		○	○	○	○		×	○	○

(注) 佐伯梅友・村上治・小松登美著「和泉式部集全釈」によって，和泉の歌に○印，和泉以外の人の歌に×印をつけた。

「全釈」は重出歌の先出のもののみ通釈しているので，重出歌には一方にしか印がない。

表Ⅱ

B		C		I	
㋑	㋺	㋑	㋺	㋑	㋺
626	627	628	629	735	736
E 心にもあらでよそなる男のもとに、雨のいといたく降る日、「なみだの雨の」ととひたるに、女もこと人いできにければ おのがじしふれどもあめのしたなれば袖ばかりこそわかずぬれけれ	てばこおきたるやるとて、おなじ人に	人からたひたる男のもとより、「わするな」とのみいひおこすれば いさやまたかはるもしらずいまこそは人の心を見てもならはめ	おなじ人、つねにわすれぬよしをのみ、いひおこすれば	正月一日、はなを人のおこせたれば 春やくる花や咲くともしらざりきたにのそこなる埋れ木なれば	くさぐさに生ふとはきけどなき名をばいづらけふだに人はつむやは
206		212		252	
B こころにあらで、よそよそになりたる人に、あめのふる日おのがじしふれども雨のしたなれば袖ばかりこそわかずぬれけれ	ナシ	こころかはりたるをとこの、「まくらしばし、おもひかはるな」となんいふに いさやまたかはりもしらずいまこそは人の心をみてもならはめ	ナシ	ナシ 正月七日、おやの勘事なりしほどに、若菜やるとてこまこまにおふとは聞けどなき名をばいづらはけふも人のつみける	

	K			
㋩	㋑	㋺	㋩	㋺
		800	801	787
ナシ	すみよしに詣でたりける人、いとほどへて、「いかが」などいひたるに 忘れぐさつむほどとこそおもいしかおぼつかなくてながらへつれば 津の国なる人、「たびたびふみやりしはみぬか」といひたるに なには人なにはの事をかけりけむただこのたびぞみつのはままつ		二月つごもりがたに、人々きて物がたり、「などしてはなのちりにけるさうざうし」などいふに いたづらにかへらん事を思ふかなはなのをりにぞつぐべかりける	ナシ
253	243	244	245	246
返し、おや なき名ぞといふ人もなし君が身に生ひのみつむと聞くぞくるしき	津の国より、人のいひおこせたる 忘れ草つむ人ありと聞きしかばみにだにもみず住吉の岸	かへし わすれぐさつむほどとこそ思いつれおぼつかなくて程の経つれば	ナシ	はるつかたの人のきたりければ、花もみなちりにければ、みちなりなどにや いたづらにかへらん事をおもふかな花の折にぞつぐべかりける 返し、をとこ 散りにけむ花をばいまはいかがせん見てすぐしけん人にとはばや

L			M	
㋩	㋥	㋭	㋑	㋺
804		805	814	815
むめの花ちりて、くちをしがりし人の、また四月二十余日の程にきたるに けふもまたなにかはきつるひとへだにちりもの残ずやへの山吹	ナシ	「をりからしたる技はおかずや」といひたれば さてのみはやまじとおもへえだをさへ折りからしてぞ井手の山吹	懸想する人のきて、物などいひたる程に、こと人のきぬれば、これかれたちわかるるほどに「あふぎをかたみに」ととりかへてけり、つとめて、はじめの人にいひやる かたらはん人もなかりつとりかふとおもひしははやあふぎなりけり	をとこ、「これはなどかすてつる、とりにたまへ、とりかへなくはあしかりなむ」とておこせたる 人もなく鳥もなからむ島にては此のかはほりもきみもたづねん
247	248		219	
このおなじをとこ、又やまぶきのちりはてにたるに けふまたなににか来つるひとへだにちりものこらず八重の山吹	かへし ちりにきといひてややまん山吹の折りからしたる枝はなしやは	ナシ	しのびて物いふ人のあるに、こと人のあれば、いそぎて出づるに、あふぎかはりにけり、やるとて かたらはん人もかなりつとりかふと思ひしやる扇なりけり	ナシ

N		P		Q	
㋑	㋺	㋑	㋺	㋑	㋺
250	251	151		183	184
七月八日、大将殿よりありしはわすれて、御返しにきこゆる 七夕のけふのよはひのうちかへりまた待どほに物や思はん	彦星はおもひもすらんなかなかに秋はきのふのなからましかば	播磨のひじりのおもとに結縁のためにきこえし くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかにてらせ山のはの月	ナシ	赤染がもとより ゆく人もとまるもいかに思ふらんわかれてのちのまたのわかれを さりたるをとこの、とほきくにへゆくを、「いかがきく」といふ人に わかれてもおなじ都にありしかばいとこのたびの心ちやはせし	

N		P		Q	
㋑	㋺	㋑	㋺	㋑	㋺
250	251	151		183	184
七月七日、「たなばたまちどほにおもふらん」と人のいひたるに 彦星はおもひもすらんなかなかに秋はこよひのなからましかば		播磨のひじりのもとに くらきよりくらきみちにぞいりぬべきはるかにてらせ山のはの月	ふねよせん岸のしるべもしらずしてえもこぎよらぬ播磨潟かな	ナシ	さりにけるをとこの、とほきところへゆくを、「いかがおもふ」といひたれば わかれてもおなじみやこにありしかばいとこのたびの心ちやはせし